和歌七部之抄

秀歌大体 上

昭和五十年五月、飯島書店にて
求む。估価二千八百円の安価なり
村井 順

九曜文庫

狂歌之體大畧上　狂哥ハ太神代ニ有けり

随耄昧し党悟書連し古今和文稽諸

無稽者乎

老耄ハ八十九十と云之　禮記云　字注云　民乃の人之昧をく

こゝかし讀字之羽ハ不可ニ三代といへりと證

可為かくし詠歌大概讀て後並ニ三首をよむ

と侍りわるかるら三首よはかさね居らさ

ふ事なまじゐに出ぬめ此侍へるかしりへかゝと

くも讀けれは稀なる事こ

壬生忠岑　家大祐定隠月

春立てとよみ侍りける

山寺にて八重ゐる梅の香を

よそにては歌よみ入らむ心ちこそ

すれ

吉野山深く雪こそ積もるらし

くる春立てと雲も見えねば

雪ふる山路へ春をとやいはむ

花なき山を人や訪ふべき

山寺にて八重ゐる梅の香を

よそにては歌よみ入らむ心ちこそ

すれ

吉野山深く雪こそ積もるらし

くる春立てと雲も見えねば

雪ふる山路へ春をとやいはむ

花なき山を人や訪ふべき

一さい思ひ侍りしを

家後云吉野山いふ山みな雪ふりて春立と

見えねばとよめる

遍照寺の辺にて春立つ心をよめる

ふるさとの春やかすみて

あらむとて山ぢ新たに

人越えて春を知せたるとよめる

春紀の詞也

○河のほとりにて

歌仙の中に上品上生の歌と也故に此のくさ
との事いふ義を續へらるゝ事と云
此説云源道済といふ歌乃十躰を立てるに
身一ツに事よ入らるゝ也後鳥羽院哥
躰等乃作者也古今の序に
と及分しそれ
を家夫乃法則とこゝろ得べし一定家卿乃
もろ〳〵の述懐を通ふかれもとも我ものと
也

光孝天皇御宇仁明第三皇子八代にあたり給ふ

哥乃さまざまなるをよめるくさ〳〵
此歌ハ注よりおくれ侍り
有心躰乃哥や有心躰といふ名ハなし
親乃こゝろぬしと云哥ハ
分別こゝろ
君をおもふこゝろ
更と濃のくれなゐ
てあそこゝろ
玉ゆてハ花ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みしもうすらもとりあへず雪も
も見給ぬ説可有用ゝ不孝云ものまさるかとの
らさるそうそくき悪流云ものまさるかい天雪とか
きわ牧云古今ものいひ春ひ
○おのひさ春ひ
て雪もて降つゝ
ふり新句なゝて
もの寺熟句
雪い巻て海りん
きりの降ふる

人のひさかたもとゝもて
友云ふ初雪ふ
の家ふ久ゝくゝ
まわけまてはゝ
ふらいあるふ作ひるかう
雪れ梅花とおゝく
ふくゝ名降まてゝ
ふりそあるふん
らねといんあめ

紀貫之　文治二男ゝ

余情无くやさしき歌どもをそうと心得
たるやうなどそうと心得
不可然歟
は昔より詞書よあらず浄さやあるべしと
云云

四一 橋花咲よりしも忌行の心のかひうみゆうの
忌行は支忌日墓所と行
も不聞て定家
ふく秋初ふく
定家

哥之永廣大乃哥
しうとも定家
うう山のうみ
也川歌為家○明源流和山乃橘夜の
花咲ぬるしうう

源俊頼朝臣 経信卿

橘咲初しうう久
山哥の物語
如此云事
よ夜うひ行

得給うそよかく
みしかきこの中ゝ
折うしつゝ
歌とこそ花乃咲物
きゝらくゝゆゝ

是ハ帝と武ふ[illegible]時代ゝ人ゝ人も同時
[illegible]てこの歌ゝみしぬゝ

第五二

百ゝなれ大ゝ人ゝ
万葉ゝ集ゝ
と給りゝ
百磯ゝと

[illegible]

[illegible]

方ゝうつてうつ
うつて抱ゝ
色ゝ乃[illegible]
文人の
乃大ゝ人の

第五二

梅咲ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

後馬羽院御製 [illegible]

九首ハ長き物なれバ終よりて尾と何ふ事也
中ゟそも長尾之其それを長くし事を
般此夜乃ながさをいひけんとて詞を何る之此れ
言ハ春此日也おそき春乃事を詠して是
ハ後成卿乃九十九賀をとよりさせ給ふ
ましまする時乃四言之後四乃名字なる人ゟ成
南殿云御寮のくと九文字よ取なし遠山
鳥乃を此字と十文字よ寄して九十乃かずれ
と九十とはそりし何るすと云へも何る南流
し不用さ南云後鳥羽院乃後字讀入ることと也

ゼかけふかうし傳法輪處よて菓藏法橋よ相傳
し給ひしや公とは後如却ゟ讀良家と
ハ後とふみ字讀之とさく京一條殿閑あてそら
よみ傳ふまく哉やうよ可讀やら仰さ
流や同菓藏相傳しゆりさく大方は讀や
とゆるよ下と却ゟ讀子流とハよくとも声子
讀り下とふみよ讀くるをよくとも讀よまめ
流がく也合也代之後京極攝政と後とふかう後
深草よすとをめらと讀りさ狗をめつとも
こともくよゝかう幼くて流氏奇し之御自筆

ありしめしとや時代不同歌具字親
王とおぼしき
御一

寺号

とうとくも元の墨よ
山のこころも
と感給ふ
こゝろ
と母あふ
と是に法
て讀る
西山法師 信名則法然上人
諱は
法号也

宗性法師 通昭云信救云利
尼近将監

寺号

浮き寺とは春の山邊より海
賞ありけるに
ふ歌をまれ
ひと京北野の
の歌のまを書人
とそれを
ありとさえ
とこれいは
ふ事無一夜宿
讀人不知

参二
権うの前大納言為家卿
三首
権うの前大納言為家卿
三首

権うの前大納言為家卿

仍えの浦をけうの心をよめる

我おうち老の心とうとくもけうのひろき
と永ふの二の妹うあうち家かうの紀葉かう作つまとりひろ

権うの前大納言為家卿

○ふ妙ん権うそてきの二首家集すりの二首と
追令
○折おりの過ぎ元の御ぐよおうち権列うやくの思うん
参二
○此沙弥ど権列うやくの妹ぐ宇ぢ元の寺ぢもの
小野小町 お前郡司の妻流女
衣更めと

参二
元の色いうはうんまきうち松浪よ我ぬ世ぬ海を
長雨ぬ頃よめる
雲いうち元の空いうち思ぬいうち長雨ぬ降うつるる
ともうこうぬよりうくうよおうち
長雨ぬ頃よめる
ぬしとおう詠うくうはうまきうち思ぬいうち長雨ぬ降うつるる
色元の文うは小町う我ぬ世ぬ海を渡う我ぬ身元
りさ海を渡う我ぬ身元ぬ海をしまおうは
ふうし数ぬ世ぬうひくまうち数ぬ世ぬうひくまうち
我ぬ身元ぬ海をしまおうは我ぬ身元ぬ海をしまおうは
陳おうしてうち

十

打渡す所なる宇底なしも此首をよみ侍
侍りし人毎に拝み奉りて身を以てしたふもの
此とかり侍る人きよしそ御説古今第一を
歌なと之此詠とは藤家乃ふしに吟せしと為氏を
はなしとこ之大かたハ詠此字感へしもとも世中に
見え川さらし御しみさ川かみてあしぬ事を誠に
去た乃あり此哥はまた事かつしく辛よりて
無常の哉もりて生死の世を又一義此哥も一二句乃書入
之説あり

皇太后宮大夫俊成　中納言俊忠男也

初五二
へやえんみや　ここ見んとゝいふ　よみるけるを　おもはれぬるなり

又やみん交野のみのゝ桜かり花の雪ちる春の曙

此哥又やみんとハ又見まじきにやあらんと云心也
やよひの桜かりを此興を催せし桜かりの光景
のをおしみまた見るまじき事を思ひやる交野の
御野は惟喬親王の御狩の在所ならし
かくて俊成卿の御説　古今真字云　良殿上京の貴人家の事なし
此ころの事大切なる是を思ひ侍りて
賢人の経宿此二親会して相逢ふ事を知るべし
あり此哥も清か乃命の常なき事を思ふへし

紀友則　紀納言未詳　宮事

秀歌大体 上

[illegible]
[illegible]
[illegible]

以歌 [illegible]

なを我も [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

せる今もかくよめる歌こ　源義親
望女綺合帝
波乃龍田川の井もとにて題

十三
人丸
あふ坂の焼藻の煙打ちなびき
立田女郎花いとおもしろく
こそ侍るめれ
ありしかへまき事ども成ぬ
煙なくせうくしくさへ
とこそ思へ

望春石文集像成
海士
焼火たく志賀の浦風打ちなびき
衣乃うらやくしくこそ
西行法師
遥に過の清ふかき柳を
見ハ網引歌こ
やくしくこそ侍ども
そこそこ乃ふ立て
よ清水ふかき柳陰乃立ちかくれよ
猶日陰こそ

[illegible]

初句之
[illegible]

[illegible]

[illegible]

年月を経ること久しくして訛むること
久遠一万九千劫と流し指して沙数と
仮りそえ云う仏寿命道安の説一訓千金乃至法
華経を説き給うと云う今は本地甚深の義を顕し
入ると云う等

安貴王 宝龍門僧正王子也

いつとなく春日の里に来て見れば
今朝降る朝の風に散る

の奇なり 御門院御説云 朝日の寺と云 朝日
ますと云 文字 又 朝日の寺 御門院御説云 朝日の寺
此朝日小峰にたつと名付 洛東にあるべし
洛東に此寺久しく絶て今よりおこすべし
修古今 為家 不相応也
又法華也

五慶法師下

八重山吹 後拾遺 後花園院御説云 八重山吹
実ならぬ 実ならぬ宿は 誰来とや

と人に読けれ侍りし比変書つそ
うくゆきて侍りし
時をれ人きん
貫之の秋の
たるこゝ
しと
貫之うの
藩
らむ
貫

雪
秋
の
よ
し
東坡秋懐詩云

雪窓法師 生涯寺
通

秋の暮の年も
秋のこゝ一年十二月
秋るれ
よ
し
後感
の
燒
東坡秋懐詩云

悲

西行法師

一曲は実盛の
くらさこそ
作くこゝろの
門之陣跡
心風
の義と可聞今風よりの
みくとゝもに
歌也長
とゝもくゝ

野
こゝろ
して露
作
三義を
の
ほの
作
ん
と

も今ゝくゝ
院之本歌
也意
ーゝのそ

大江文里 秀義多人也

川風
大方昭明
歌也
物
作
義
物
詠
秋

○詠まことのみくによ物なり人の我邦也こゝの
業也雲風も叶ふことわざ也ことに人の
一つ見る月千緒萬端有思ふ侘る仍之師
統天下ゆへんに侍うるゝ我云いてまた
きゝ是貴家歌合仁和御門御二代ゝ
也ゆゝしくもあるかな
為一銃中腸斷是秋天水碧雨為一人蒼
寺内詩云 芙月明無思況復損君顔色減君年
歌とゝもにゝゝとも 寺内云々越前の支し
後京極摂政前太政大臣

右ゝゝなおのゝの義時ゝ屋ゝ月ゝ
思ふゝ萩ゝ
おゝゝ萩ゝ花ゝ
屋ゝ月ゝ
ゝゝ秋ゝ
添ゝ萩ゝ
為一毎云下
き萩ゝ枝ゝ
変ゝ秋ゝ
ゝゝゝ

世とともに煙もこえて秋の望もすむ心かな

うつりゆく秋をこの月とおもふかな

まよはなんく萩もと春焼くさまを

えもいはぬ萩の露とてそ

千句

源俊頼朝臣

のもとこん野ちの玉河萩こえ波は月やうつるらん

本土月とうと萩の花咲乱れてくるうるう

て流めの色をはらふらん

ゆうよ月は影ふく嵐の音絶間の

系乱をあはれともこんとく毎秋ごとに

てなもさくくこん

艸道都ちかき

急よ作ひとり

時まくこ云ふ五字 肝要之時自をうしなふ

うんとも

誹諧

誹諧ながら久堅の

秋月の環も

文科とうめ

殿閣うく

雪春云ふくこつて

とう洞作者也
兼載同紹之
和ふる事こうて
京朝ぼらけ作ひて
いく人ともさだまらず
きうる事こみ月
のこるそとみえし

後鳥羽院御製

雄の尾や秋よりてう
山鉾のこい明
もる秋れ夜

此歌ハ雄の尾や秋よりてう山鉾のこい明もる秋れ夜と上下ニ秋の字ヲ置キ侍ル也

おろしく我所
うる萬民と
なし人もうる

歌ハ雄の尾や秋よりてう山鉾のこい明もる秋れ夜と上下ニ秋の字ヲ置キ侍ル也
おろしく我所ニ住ム物ニ非ズ
うる萬民と
なし人もうる

慶長二年ニ禁中
ニテ

讀人志

鷹のつら
物のおしく
鷹のみや

鷹の山ニ入ル海ニ入ル人物ニ宿乃秋の上ニ有
物のおしく物カ新しく長ニ
鷹のみや

汚穢我ひとりの責時分事充爾のみこゝを
感ぜざる道達流多あるつゝまゝ風吹ば此塊
とびまわり○名所にて家毎にあつめて折を
過ん消あへぬ雪ぞ花とみるまで

人丸

春に
萩の花散ぬとよめる
雪と落てこゝに家毎にあつめて折を
とけり霜と成て庭に満ぬるまでくとあるうん
ぬまでくとは庭に満ぬるまでくとあるうん
ま雪花ぞ合ひくさんとあるうん

○萩花くこゝにあるも雪久澤れの如く霜
ぬまでよけうるまで庭に満ぬるまでくとあるうん
女乃りくと訓ずるも此等の比喩ひ猶久雪家集にあるう
行ごとく霜乃花ぞ合ひくさんとあるうん
り庭にまで満ぬるまでくとあるうん

春雪

雪の花ぞ合ひくさんとあるうん

かう雪の降ぬ日ぞなき

天智天皇沙羅双樹の華と詠ぜられしも一統の前植木一統の前植木時もうとて詠ぜられしも雪の花ぞ合ひくさんとあるうん

師明の名を拾ふ

屋いかし人の寺を問(やど)しまとかくして後(のち)
度(と)常(ほ)の事く清く歌れ仏兵秋の田(た)ゑん
倉(それ)の其(その)時(とき)氣(き)く雄を来(き)まなり招きて盤
まりも縁果(ぞ)く寂婦さく御もまさ念しけ
事の去婦くとごさ給はらせらこしく
我朝(そ)の始めよりし之道ある王道御心懐(ごくわい)の
御寄也此君ハ九扇よおらします時世を
悲(あはれ)給くかなや開闢とそて法華の人と
名(み)のしきく通(うと)し給ひし支(と)あらひ天子に
所才く此月なん此年阿らハ王道さかや時(とき)と

母やし招けしめらに法化く門るららかり月れ
菴(あん)母く先帝(こく)と寝さと兆種(あと)前山寺に
上代(じやうだい)の風なり上古ハ仏ふ身りらく思ひ入ごゑ
調(てう)ハ臣細(こまか)よりさ方わろ久し統く金殿(きんでん)をとち
居さまし(と)そ御覚御統此帝(みかど)ハ八ケ年
新羅(しんら)百済(くだら)をあつらまで高安(たかやす)の城(じやう)を
すまへら道しかと民(たみ)の労(らう)をとらへ紀
まりし也此歌(うた)ならら民(たみ)を氣遣(づかひ)とおぼし
家のさ海すめしそう○秋田かりほの庵(いほ)を流
らりま道一られた衣手ま包(むし)し露(つゆ)動よ(う)ら

○雄山かう振り居よ時々ゝ我袖ゆるも

ほとゝぎす

文屋朝康 三十六歌仙

後撰六

白露よ風の吹しく秋の野は

かたみ斗ぬきとめてけり

ゆふされは蛍の多くとひ交ひ

くるともなきに光みえつゝ

歌よみを始めて野の草の

別の宿の白露と儀なき風の

吹つゝ草の葉ごとに敷乱れて

南無阿弥陀仏

てらゝくと幸ふくと

龍田姫かすりもの

竜田姫を始めて孔雀王呪経

よれるかのごとくなるものを

連ねかけ傍らに

時親卿を始め

当座の歌

此高姫のかく
よ姫女と成て
給ん

西川法師

白雲に
鶴の友とく
名乗ろこそ
嬉し

つるされし門口の雪よりうみ落とく
雁こそ○○越ゆ
うん何よりも

読人不知

嵐風京極姫物
狂人何事も
仕ふる
ぬかと

雲天上世物
雪一寸
人も皆

風よ雪を運ひて
雁金八物皆人の
雁鳴るやの春を
物うるまで
とを知ん
ようこそ我心ひのもん

よ人の魂なくなり侍ぬ

或る問に曰く、後川氏分家女後妻死去の後、前妻の女を引取養育いたし候哉、又は後妻の方へ引取候哉

答曰、後妻の方へ引取候物也、神代の昔より然り、陽は秋の秋たる所以、陰は冬の冬たる所以、是天地の道也、然るに後妻の方へ引取候事、天地の道に背き候事也、八月の長夜の月の如く、後妻の方へ引取候事、天地の道に背き候事也、

大貳三位（紫式部女房名、藤原為時女、宣孝妻、賢子母、泉院乳母）

物思へばさわの蛍も我身よりあくがれいづる魂かとぞみる

和泉式部

おもふ方にしたがふ物と秋の風を何に付けてもまづ知るらん

○なぐさめ

秋の夜の月の光しあかければくらき心の闇はてらさる

大納言經信（中納言通俊男、後改名）

夕作まて云ふ門田の稲葉吉兆
代等ふ田家秋風と
あるとはさる物うく
く長門田のつまて夕雲れ
吉と流とゑて風こく芦れも
かるる稲こ夕作まて同
こく夕なあれとそ
作まて云ふ歌
風情をとり出あるかやとそ
ありふる句なり
風の葉を洗ふ味へまてそ
ばて秋風のやうに
ホし風ふくと句
ゆくあの雲
可愛うこいるとふ
あるよふとふ

いづれとも物思ふ人は秋の夕暮と書り　古ハ真
添ふといふ意あり常にも字を添ふハ夕暮
まちわびし心なれば淋しき人の心は
あはれなる夕暮なれば人の心も哀なる
者の此字は風の音に添ふて添辞なり 寂蓮
寂莫なれば人も気も無く見えしと寂寥なれ
く秋風の音も哀なる景気の哀れなる
ぞかし

寂蓮法師　俗名中務少輔定長 俊海阿闍梨子

淋しさはその色としもなかりけり槙立山の秋の夕暮

淋しさは其色としもなかりけり槙立山の秋
の色ハ何れの景気も哀なる詞と云ふ 秋は
何山の紅葉の色も夕暮と添へて淋しさといふ
物の此とて黄落して色をも淋しと云ふ 然るに
槙の葉は色も変らず淋しからぬ淋しさを
紛ふ所無き此歌ハ頗る淋しき所多し 槙立
山の夕暮なれば淋しさは其色なるなり を
見るに広き所なれば更に見ゆる也 ○山深く
槙の葉のしげる空を見れば淋しきと哀なる
人もあるべし

もゝしき海へ三ヶ地

奥山の松の嵐の吹ごとに
此歌はおく山の松ばかりにてもなし所もさのみ秋ばかりにてもなし
秋なりけりと打聞く俤歌ぶり◎龍田
山里の寂寞なるよりはおもしろくさびしき
なりけりと打聞く俤歌ぶり◎龍田
山里の寂寞なるよりはおもしろくさびしき
なりけりと打聞く俤歌ぶり◎龍田
山里の寂寞なるよりはおもしろくさびしき

秋てふてうさんくは如何せん
老ぬるよりはかなきをなげくべきやうや侍らん
ふる雪もまだ消やらぬ頃やなどもあれ
逢ぬ夜をかさねて
なげくべき

農家　小野篁廟

冬の
曙風吹ふくまゝに落る葉のかずかずにのみ
変ぬる窓の年の時雨けり
まばらなる葉ずゑの雨の音さえて
ふけゆくまゝに

[illegible]歌吟[illegible]
[illegible]あり[illegible]
[illegible]同[illegible]
[illegible]河[illegible]
[illegible]神[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]

甲斐寺[illegible]
源利[illegible]

[illegible]

九河内於恒九[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

紀[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

三百人一首なども入ぬる事也かやうの
○三両輯 集れる家のつゞきなれば
名ごとに

春道列樹 歌仙家集

○河よりかなたの
此歌の志賀の山越
るゝは落葉して
もとをあらはしたる
なれども
なくゆく
ものゝ
ぬるみ
あるへ
也識
まれ
事
あり○ちはや
ぶる
神代
○唐
秋風
敷
秋